

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531148

研究課題名(和文) 授業記録の読解方略に基づく家庭科における授業記録の方法の開発

研究課題名(英文) Development of Teaching-Record methods in home economics based on the reading comprehension strategies of Teaching-Record

研究代表者

佐々木 貴子 (SASAKI, TAKAKO)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60322864

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、家庭科教員の養成段階において、学生たちに授業実践力を身に付けさせるための一つの方法として、「授業記録」を基にその読解過程や方略(読み・理解のための活動・思考、知識等)を構造化することの有効性を検証し、「授業記録」を基に授業分析をする方法を開発するとともに、その活用方法を検討することを目的に行った。その結果、学生たちは「授業記録」を基にその読解過程を構造図や方略図に表したり、グループ等で意見交流していくことにより、授業を評価する力が身に付けられるとともに、このような訓練を繰り返すことで、よりよい授業を構築する能力を養うことができることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I verified the effectiveness of structuring the teaching process and strategies based on "teaching record" as one way to cultivate the teaching practice forces in training stage of Home Economics teachers. As a result, the students learn to evaluate the lesson by creating a structure diagram based on a "teaching record" and exchanging opinions in their groups and so on. Further, by repeating this training, it is possible to develop the ability to build a better class.

研究分野：家庭科教育

キーワード：授業研究

## 1. 研究開始当初の背景

近年、教員の「専門家としての確かな力量」が求められている。教員養成段階では「採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」を学生たちに身に付けさせることと考える。中でも授業を実践する力量（教科指導）に関しては、これまで教員養成段階よりも採用後の現場における実践（授業研究）の中で、先輩教員から新人教員へと知識・技術が伝承されることにより育成されてきた側面が強かった。しかし、こうした先輩教員が大量退職する時代となり、その伝承や育成は困難になることが予想される。したがって、教員養成段階でいかに学生に授業を実践する力量を育成していくかは課題である。

日本における授業に関する研究（授業研究）は、1960年代に始まり、1990年以降は授業者自身の内省、授業リフレクション、エスノメソドロジー等の質的研究に再び焦点があてられ、授業記録の作成とともに読解と活用の重要性が求められるようになってきている。しかし、教育実践の過程と成果が記録された「授業記録」は、教育現場における貴重な財産であるにもかかわらず、「授業記録」を基に授業を読み解き、教員同士で意見を交わし、その後の授業改善や充実に役立てていくような授業研究は行われていなかった。それは、「授業記録」を読解する能力は、個人の経験や研鑽の蓄積によって身に付けられるものであるとされていたからである。

本学教員の三橋は、「授業記録の読解方略に基づく授業記録改訂（授業過程可視化）の方法の開発」（基盤研究(B)：課題番号 40166062，2010～2012年度，研究代表者：三橋功一）で

の成果であるスキーマを用いた研究を継続的に行い、学習展開の過程を構造化、視覚化するための方法として「授業の構造図」を考案した。この「授業構造図の作成」を取り入れた講義は「小学校算数科教育法」で実践され、毎年、受講した学生たちからは算数に必要な指導力を身につけることができると高い評価が得られている。

「家庭科」においても「授業記録」を読解する能力を身に付けさせたいと考え先行研究をみたが、「授業記録」そのものやその読解に関する研究は、ほとんど見当たらなかった。そこで、家庭科教員の養成段階において、授業実践力を養うための一つの方法として、「授業記録」を基にその読解過程や方略を構造化することの有効性を検討することとし、研究に着手した。

## 2. 研究の目的

本研究は、家庭科における「授業記録」の読解過程や方略（読み・理解のための活動・思考、知識等）について調査・分析することにより、読解を促進する知識の体系化を検討する。

さらに、「授業記録」を基に授業分析の方法を検討・開発するとともに、「授業記録」が授業の改善に果たす役割と意義を明らかにし、その活用方法も検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)本学の「小学校家庭科教育法 C」(2010年度後期)を受講した学生 50人(男子 26人、女子 24人)に、小学校教員による家庭科の授業(実施日：2010年10月7日、対象：S市立M小学校6年生、題材名：「くふうしよう！季節に合うくらし」)をビデオで視聴させた。

そこで、学生がビデオを視聴しながら作成した「観察記録」の正確性を検討する。事前にビデオから文字起こしをした「授業記録」を基に、学生が作成した「授業構造図」の正確性を検討する。学生が授業者の立場で作成した「学習指導案」の正確性を検討する。実際の授業を参観した教員の授業評価とビデオ視聴した学生の授業評価を比較・分析をする等を通して、「授業構造図」を作成することの有効性を検討する。

(2) 本学大学院の「家庭科教育学特論」(2012年度後期)を受講する院生6人(女子のみ)に、「家庭科」と「家庭科以外の教科」における指導方法の特徴(違い等)を理解させるための一方法として、「授業構造図」作成の有効性を検討する。

(3) 本学の「中学校家庭科教育法」(2013年度後期)を受講する学生15人(男子2人、女子13人)に、事前に教育実習中の自身の授業をビデオに収録(映像記録)し、文字起こしをして「授業記録」を作成するように指示しておいた。2013年10月22日~12月24日までの10回の授業において、映像記録を活用した省察をする、文字記録を活用した省察をする、観点別授業省察シートを活用した省察をする、授業構造図を活用した省察をする等を通して、学生はどのような視点で授業を省察しているかを分析・検討する。さらに、いずれの方法が授業実践力を養うために有効であるかを検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 学生がビデオ視聴しながら作成した「観察記録」の正確性を分析した結果、教育実習を経験した学生(以下、経験者という)は、教師や児童等の教授・学習行動の

約4割を記録しているのに対し、未経験者は3割であり、教育実習の経験による差が若干みられた。経験者と未経験者の「観察記録」を比較してわかったことは、経験者は観察中にキーワードのみを書き入れ、観察後にそれをつないで文章化する作業をしていたこと、観察中に発言内容を要約して記録していたこと、授業中の非言語行動(教師の動きや表情・児童の挙手や反応なども含めて)を記録していたこと等であり、これらは授業観察の経験を重ねる中で身に付けられたものと考えられた。

「授業記録」を基に学生が作成した「授業構造図」の正確性を分析した結果、「正確」と判断された者は全体の22%であり、「ほぼ正確」は30%、「不十分」26%、「不正確」22%であった。教育実習の経験の有無で見ると、経験者よりも未経験者が作成した「授業構造図」の方が、正確性が高かった。これは経験者が「授業構造図」を作成できなかったわけではなく、むしろ経験者は「授業構造図」を基盤に、より高度な「教授方略・意図の遷移過程とその構造図」を作成していたことがわかった。「教授方略・意図の遷移過程とその構造図」の作成には、教師の意識的内面的過程を記録する力が必要となるが、教育実習を経験した者たちは自身の実習経験からこの力を身に付けていたため、「教授方略・意図の遷移過程とその構造図」の作成につながったと考えられる。

このことから、実習前に「授業構造図」を作成させることは、教師の働きかけや課題解決に向かう学習者の考えや活動を構造的に可視化することができ、さらに学習展開の過程を吟味・検討していくことにつながるため重要な手段であり、この作業を繰

り返し行っていくことが実習中に実践力を身に付けていくことにもつながると考えられる。

学生が指導者の立場で作成した「学習指導案」を検討した結果、未経験の学生たちは縦軸に示される導入・展開・整理等の時間経過や指導段階よりも、横軸に示される学習内容や、子どもの活動、教材・教具などの記載を重視していることが推察できた。また、経験者の全員が時間軸に沿った指導の流れ(内容)を記述できていたのに対し、未経験者の約7割(25名)は「授業構造図」がそのまま展開部に記載されているような流れ(内容)であり、簡潔さに欠けるものとなっていた。このことから、学生たちに授業を作成する力を身につけさせるためには、単に「授業記録」を基に「授業構造図」を作成することにとどまらず、「授業の教授方略・意図の構造図」を作成するプロセスが重要であることが確認できた。

教員10名(小学校教員4名,中学校教員3名,高等学校教員2名,大学教員1名)が行った授業評価では、授業者である教師の発問の仕方およびその内容、授業の中で行われる子どもの発言に対する切り返し(問い返し)の重要性、さらに子どもの発言や教師の言葉の使い方などの言語活動や家庭科の授業目標である実践的体験的な活動の重要性についての指摘があった。

これと学生たちの授業評価とを比較した結果、学生たちは目に見える現象を評価することはできるものの、授業の中で行われる教師の発問や児童の発言、教師と児童、児童同士の交流など、授業内容とかがかわらせながら評価する力は十分ではないことがわかった。

以上のことから、学生たちに「家庭科」の

授業を作成する能力を身につけるためには、授業実践をビデオ等に録画し、その映像をみせながら「観察記録」を作成させたり、「授業記録」を基に「授業構造図」を作成させたりすることが重要と考えられる。ただ、授業を作成する力は、授業を実践する力とは同義ではないため、授業実践力を身につけるためには、現場での実践は欠かせない。「家庭科の授業をどのように実践したらよいかわからない」という学生たちには、この作業は有効であったと考えられる。

(2)「家庭科教育学特論」の受講生が、「授業構造図」を基に「家庭科」と「家庭科以外の教科」(ここでは、理科)における指導方法の特徴(違い等)を比較・検討した。その結果、「理科」は時間内に一つの規則性を生徒に見つけさせるために、学習課題が授業の最初に提示されている。また、実験の後に、必ず結果の確認を行い、目標に達していない場合は授業者が補足するか、またはもう一度実験をさせて、求める(一つ)の結論に到達するように展開されている。

一方、「家庭科」は、課題解決の結果はあくまでも共有にとどまり、求められる結論は各自に任されている。また、課題解決の結果を共有した上で、さらに自己の課題の解決を深めさせている点が「理科」とは異なっていた。つまり、「理科」の授業は一つの法則を様々な方法で導き出していることが「課題解決」の姿であるのに対し、「家庭科」は自己の価値観を再発見し、見直し・深める(応用していく)ことが「課題解決」の姿であると考えられたと結論づけた。

以上のことから、「授業記録」を基に「授業構造図」を作成・分析する作業は、「教科」の特徴を捉えることのできる手段としても使え

ると考えられる。

(3)「中学校家庭科教育法」の受講生は、現場教員や自身の授業実践を振り返り、授業分析をしていくのか、学生たちにとって効果的方法を開発するために検討を行った。

その結果、映像記録を活用した省察では、学生たちは教師の行動(方略、態度)や指導法(教材、活動など)に着目していたものの、授業の映像を表層的にとらえており、生徒の思考を深く読み取って関連付けたり、それぞれの授業場面の関係を分析するといった面はみられなかった。文字記録を活用した省察では、映像記録を活用した省察と同様に、教師の行動や指導法には着目していたが、教師の発言の意味は考えられていなかった。観点別授業省察シートを活用した省察では、映像記録や文字記録を活用した省察と同様、教師の行動や指導法が中心であった。しかし、授業の具体的な場面に位置づけ、改善方法を考えるなど、省察の視点は深まった。「授業構造図」を作成した省察では、授業構成や生徒とのかかわり、発言の関係性、活動の意義など、これまでの省察ではみられなかった視点を挙げていた。

以上のことから、学生の授業実践力を向上させるための効果的な方法としては、次のような手順が考えられる。

まず最初に、学生たちには「授業記録」を基に「授業構造図」を作成させ、それを使って省察を行うことである。この構造図の作成により、授業の構成や生徒とのかかわり、発言の関係性、活動の意義などについて着目することができるようになる。さらに、高度な段階として「教授方略・意図の遷移過程とその構造図」の作成までを行う。このとき、一人で作成した構造図等を数人のグループで再

検討することが望ましい。また、これを繰り返し行うことが良い結果を生むことにもなる。ただ、授業で繰り返し行うことが難しい場合は、一度丁寧にこの作業を行うことが効果的であると考えられる。次に、映像記録と文字記録のみを活用した省察を行う。この時点で学生が省察の視点が獲得できているかを見る。もし、獲得できていないと判断される場合は、「授業構造図」の作成を再度、行わせる。このような繰り返しにより、学生は「授業構造図」を作成しなくても構造図をイメージしながら、映像記録や文字記録を活用して省察することが可能となる。実際に、現職教員は授業構造図を作成しない状態であっても、正しく省察を行うことができていた。このような手順によって、学生はより多くの視点からより深く省察を行うことができるようになる。さらに、この過程で学生は、授業を省察することの重要性にも気付くことができる。つまり、このことで授業の省察への積極的な態度が形成され、教師になってから授業研究を日常的に行う動機付けにつながると考えられる。

本研究は、家庭科教員の養成段階において、授業実践力を養うための一つの方法として、「授業記録」を基にその読解過程や方略を構造化することの有効性を検証し、その活用方法を開発することであった。この研究を通して、学生たちは現場での実践や学生自身が教育実習等で行った授業実践を記録し、それを基に「授業構造図」を作成したり、さらに高度な「教授方略・意図の遷移過程とその構造図」を作成したり、また一人ではなくグループ等で意見交流をさせたりする中で、授業を評価する力を身に付けていった。

筆者は、家庭科教員の養成段階における大学教員として「家庭科教育法」の授業を受け

持っているが、本研究の成果を取り入れた授業を自らが実践していくことの重要性和教員養成段階で「教科指導の実践力を養う」ことの責務も再認識した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

佐々木貴子，授業記録を活用したプログラムの有効性に関する一考察 - 授業記録・授業構造図・学習指導案づくりを通して - ，家庭科教育研究（北海道家庭科教育協会），査読無，第18号，2014，35 - 46

佐々木貴子，東輝，学生の「授業記録」と「授業構造図」の作成に関わる調査の一考察 「小学校家庭科教育法」での実践事例から - ，北海道教育大学紀要（教育科学編），査読無，第64巻，第1号，2013，191 - 205

〔学会発表〕(計2件)

佐々木貴子，授業記録の読解方略を基にした家庭科と他教科の学習過程の比較・検討 - 「家庭科」と「理科」の課題解決への姿の違い - ，日本家庭科教育学会，2014.11.15，東京学芸大学（小金井市）

佐々木貴子，学生の「授業記録」と「授業構造図」の作成に関わる調査の一考察 「小学校家庭科教育法」での実践事例から - ，日本家庭科教育学会，2013.6.29，弘前大学（弘前市）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 貴子 (SASAKI Takako)

北海道教育大学札幌校・教授

研究者番号 60322864